

中央电视台电视教育节目用书

星期日日语



日曜日の
たのしい
日本語

中央电视台电视教育部编
广播出版社出版

中央电视台电视教育节目用书

星期日日语

日曜日のたのしい日本語

83—2（总2）

中央电视台电视教育部编

广播出版社

星期日日语83—2

〈总第2期〉

中央电视台电教部编

广播出版社出版

外文印刷厂印刷

新华书店北京发行所发行

1983年3月第1版 1983年3月第1次印刷

787×1092毫米 16开 印张2.75 字数70.4千字 印数1—30,000

统一书号: 9236·018 定价: 0.37元

目 录

1. 愛と死 (生死恋) (1)
2. 箱根 (箱根) (24)
3. 有田 (有田) (29)
4. 日本人の富士 (日本人的富士) (32)
5. 京都——洛中洛外 (京都的市内和郊外) (37)

《星期日日语》每星期日下午三时起由中央电视台向全国播送

愛 と 死

大 宮：（ナレーション）始めて夏子を見た時、彼女は実にいい球を打っていた。ちょっと意地悪なほど相手のスキをつい①た鋭い球であった。あの日が何もかも始まりだった。それが僕を変えた。

野 島：おい、ロッカー②入れといたよ、着替え。

大 宮：ああ。

野 島：大体合うだろ、俺ンなら。

大 宮：うん。しかし、随分やらないからなあ。

野 島：下手なのは知ってるさ。

大 宮：うまいな、あの子。

野 島：うん？ 目が早いな。

大 宮：いやあ。しかし、きれいな人じゃないか。

野 島：そうか。

大 宮：ああ。

夏 子：（笑う）

大 宮：あ、いかん。

野 島：（笑う）

夏 子：ごめんなさい、高すぎて。

野 島：どう思う？ あの子？

大 宮：うん、形なし③だったよ。

野 島：あれで科学者なんだからな。

大 宮：科学者？

野 島：ああ、製薬会社の研究所から、大学院へ行ってるんだ。

大 宮：そりゃ意外だな。

野 島：そう言う所がよくてな。

大 宮：うん？

野 島：いいだろう、なかなか。

大 宮：うん？ この野郎、恋人そそのかし④て俺をやっつけるなんて、趣味悪いぞ。

野 島：（笑う）

大 宮：（笑う）

野島の母：進さん、進さん。ううん。よいしょ、ああ重たい。いやね、こんな奇抜な設計するもんだから。

大 宮：しばらくです。

野島の母：あ、いらっしゃい。

大 宮：ご無沙汰してました。

野島の母： あ、岬の研究所へお戻りになったのですってね。

大 島： はあ。

野島の母： お長かったのねえ、九州の方は。

大 宮： いえ、高知なんです。

野島の母： あら、四国でした？ まあ、あったかい所って覚えたもんですから。

大 宮： お元気ですね。

野島の母： はい、もう元気なだけ。そう、あなたたち、高校生の頃は、まだ美貌が残って
ましたよね。（と笑う）

野 島： 変なこと言うなよ。

野島の母： 二人でよくごろごろし^⑤でましたね。

大 宮： はあ。

野島の母： 見て頂戴。その進がこんなお部屋を作って。

大 宮： うらやましいですよ。

野島の母： なんだか知らないけど、いっぱし^⑥芸術家のつもりで。

野 島： いつそんな顔したよ。

野島の母： ああ、これ。このポスターね、去年の年間優秀賞頂いたの。

野 島： 行ってよ、ママは。

野島の母： あら、かくさなくなたっていいじゃないの。ここ三年の間にね、コマーシャルの
フィルム^⑦でも、三つも賞をいただいんですのよ、ね。

野 島： よせったら、みっともないじゃなたいか。

音 楽： ヤーヤーヤー……ウェイ……………

野 島： はい、ここでウェイってやるんだ

野 島： まともな仕事^⑧じゃないよ。

大 宮： そんな事あるもんか。

野 島： 風船の靴でもはいたみたいに、地面に足がつかなくなってるな。

大 宮： いい仕事してるじゃないか。

野 島： だんだん嫌な奴になってくるよ、俺は。

大 宮： 気の弱いこと言うなよ^⑨。

野 島： （笑って）まったくだ。しかしな。

大 宮： うん？

野 島： ヤッ、うん。

大 宮： うん、えい。

野 島： 昔はもうちょっと高級な野心をもってたがな。

大 宮： おい。

野 島： うん？

美女の声： ママ、痴漢よ！

野 島： おい、こっちだ、こっちだ。

大 宮： （笑う）

野 島： （笑う）

大 宮：（ナレーション）僕は、僕の情熱が誰にでも分るものとは思わない。ある人は石にばかり夢中になり、ある人は鳥ばかりを追いかけて、僕は魚しか目に入らない暮らしをして何年になるだろう。孤独な、しかし、魚を愛する人には分るだろう。豊かな喜びにも事欠かない^⑩ 世界なのだ。

大 宮：やっぱり汚れてるんだなあ。

土 井：まわりがひどいですからね。この辺も人口が増えたし。

大 宮：しかし、四国がえらく淋しかったからな、人口が多いのはいい。この頃、やたらに人恋しいよ。

土 井：大宮さんが？（笑う）

大 宮：なんだ？

土 井：いや、嫁さんがすんですね、そりゃあ。

大 宮：そうだな！

大 宮：（ナレーション）たしかに若い娘たちのいる雰囲気求めていたとも言えるだろう。しかし、今思えば、その頃からすでに、ぼくは心の底で夏子だけを待っていたのではないかという気がする。

夏 子：こんにちは、こんにちは。

大 宮：こんにちは。僕じゃないかと思って。

夏 子：どうして。

大 宮：いや、覚えていないかと思って。

夏 子：まあ。（笑う）

野 島：よう！

大 宮：やあ！

野 島：またやるか、彼女と？

大 宮：ううん、お前がやれよ。

野 島：そうだな。じゃ、やるか。

.....

大 宮：送ってくれなくていいよ、きょうは。

野 島：ああ？

大 宮：バスで帰るよ。

野 島：どうして。

大 宮：日曜のたんび、つき合わせちゃかわいそうだからな。

野 島：（笑う）いいって。

大 宮：あんまりほっとくとロクなことないぞ^⑪。

野 島：なんだ、彼女か？

大 宮：着替えてんだろ？ いま。

野 島：気を使うなって。

大 宮：そりゃ使うさ。

野 島：夕方、一緒に東京へ行くんだよ。

大 宮：そうか。

野 島：芝居の切符があつてな。

大 宮：そうか。そんなら送ってもらふよ。

野 島：お前にもいいの、ひき合わせなくちゃな。

大 宮：自分でさがすさ。お前の世話にはならないよ。

野 島：ほほう、そりゃ結構だ。

野 島：じゃ、もう一緒。これどうも。

女性係員：はい。

野 島：行こうか。

夏 子：ええ。あら、大宮さんは？

大 宮：は、途中まで。

.....

所 長：うん、こりゃ立派なもんだね。

大 宮：これは、T6の人工岩礁の三年目ですよ。

所 長：うん、大分差ができてきたね。

大 宮：はあ。

土 井：おい、大宮さん、サンプル^⑫はもう沢山ですよ。帰りますか。

大 宮：帰りたいゃ帰れ！

土 井：いやだよ。大宮さんは、海へ出ると長いんだから。

漁 師：好きだねえ、あの人は。

土 井：一人で楽しんでるんだから。こう陽にやけちゃあ、こっちはもてないよ。

漁 師：（笑う）。

大 宮：（ナレーション）しかし、日曜がくると、僕はまたテニスクラブへ出掛けた。

心に飢えがあつて、行かずにはいられなかった。

女性係員：お待たせしました。相すみません。やはり、いまでも規定より会員が多いものですから。

大 宮：そうですか。残念だなあ。

女性係員：申しわけありません。

大 宮：ヴィダット^⑬だと、金がかかりすぎるんでね。

夏 子：すみません。この間ラケットのはりかえお願いしたんですけど。

女性係員：はい、おあずかりしてます。

大 宮：こんにちは。

夏 子：あら、わたくし？

大 宮：は、そうです。

夏 子：（笑って、冗談で）私のことなんか、覚えていらっしゃらないかと思ったわ。

大 宮：（笑う）

女性係員：お待たせしました。

夏 子：ありがとう。つけてありますね^⑭。

女性係員：はい、確かめますけど。

夏 子：木曜の夜、時間とれますかしら。

大 宮： なんですか。
夏 子： 家にいらしていただくと思って。
大 宮： 僕がですか。
夏 子： いろいろ伺いました、野島さんから。
大 宮： 何しゃべったんでしょう？
夏 子： 野島さんもいらっしゃるんです。お暇でしたら、どうぞ。
大 宮： はあ。しかし、僕が行っていいのかな。
夏 子： 海がとっても大好きなんですってね。
大 宮： ええ、まあ、仕事です。
夏 子： 是非どうぞ。
大 宮： はあ、時間がとれましたら。
夏 子： お待ちしてます。

.....

野 島： 行こう。
夏 子： ようこそ。
野 島： ちょっと遅れなっちゃって。
夏 子： いいえ。（大宮へ）いらっしゃい。
大 宮： こんばんは。
夏 子： さあ、どうぞ。
大 宮： はあ。
野 島： ご誕生日おめでと。う。
夏 子： ありがとう。
大 宮： おめでとうございます。
夏 子： どうも。ほんとはもう、あんまりおめでたくないんですけど。
野 島： これ、君が欲しがってたもの。
夏 子： あら、なにかしら。
野 島： 元町で、売れちゃったって口惜しがってたじゃないか。
夏 子： 困るわ、あんな高いもの。
野 島： ううん、高くないったら。さあ。
夏 子： ありがとう。
大 宮： あの、僕は……
夏 子： あら、大宮さんは困ります。だから誕生日だと申し上げなかったのに。
大 宮： こっちは本当の安物なんです。きっと笑われちゃうけど。
夏 子： ありがとうございます。

.....

大 宮： 失礼。
夏 子： どうぞ。
女 中： おかえりなさいませ。
修 造（夏子の父）： はい、ただいま。

幾 代（夏子の母）：おかえりなさいまし。
修 造：おお、また大騒ぎか。
幾 代：大学の頃ほどでございせんけど、それでも十人近くいらしてるかしら。
修 造：いい年をして、女の誕生日に集まってくる男っていうのはどういう奴らかねえ。
幾 代：あなた、すぐ焼餅をおやきになるんだから。

.....

野 島：おい、どうした。
大 宮：うん、どうも場違い^⑮だよ。
野 島：勝手にのんでりゃいいのさ。
大 宮：なかなか広い庭だな。
野 島：ああ。
大 宮：嫁さんにしたら、苦労するぞ。
野 島：まあ、ぜいたくはぜいたくだろうがな。
大 宮：決まってるのかい。
野 島：うん？
大 宮：式^⑯さ。
野 島：いや、まだまだだ。
大 宮：落ちついてるんだな。
野 島：うん？ フフ（と苦笑）
大 宮：なんだい。
野 島：手強く^⑰てな。別に喧嘩したわけじゃないんだよ。誘えばドライブでも、夕飯でもつきあうんだけどな、前のようにじゃないんだ。楽しんでないのが分るんだ。手のどこしようがない^⑱みたいに、見る見る熱がさめていくのが分るんだよ。
大 宮：そんなふうには見えなかったな。
野 島：お前は、彼女を見たときに賞めたからな。
大 宮：いやあ。
野 島：あまり知られたくなかった。
大 宮：うん。
野 島：やるか、ピンポン。
大 宮：ああ。
野 島：テニスよりもうまいだろ、お前も。
大 宮：そうだな。
夏 子：どこへ行ったのかと思ったら。
野 島：やろうか、ピンポン。
夏 子：球があるかしら。ずっとやらないのよ。兄がアメリカへ出掛ける前ですもの。
ほら、ネットもとらないで、ヨレヨレ。
野 島：みんな、あまり踊らないね。
夏 子：年とったのね、少し。大宮さん。

大 宮：はあ？
夏 子：いただいたペンダント^⑱。
大 宮：駄目でしょう、趣味悪くて。
夏 子：いいえ、とってもいいわ。（野島へ）素敵よねえ。
野 島：へえ、いいよ、なかなか。
夏 子：それから、これが野島さんの。ありがとう。（大宮を見て）ありがとうございました。
ました。いらっしゃいよ。二人もぬけだしたらしらけ^㊱ちゃうわ。

.....

大 宮：お客さんって、どこ？
女 の 子：あら、今そこにいたんだけど。
大 宮：やあ！なんですか、こんな所へ。
夏 子：近くまできたもんですから。
大 宮：先日は大変ご馳走になりまして。
夏 子：こちらこそ。ちゃんとかけています。
大 宮：困るなあ、安物を。
夏 子：どんなお仕事してらっしゃるのかと思って。
大 宮：僕がですか。
夏 子：見せてくださる？
大 宮：はあ。でも、つまりませんよ。
夏 子：じゃ、どうして。
大 宮：は？
夏 子：つまらないお仕事に、どうして夢中になれるのかしら。
大 宮：僕にはおもしろいけど。
夏 子：ご迷惑ですか。
大 宮：いや、そうじゃありませんけど。
夏 子：为什么呢？
大 宮：水族館、入ったことがありますか。
夏 子：いいえ。
大 宮：じゃ、ご案内しましょう。どうぞ。
夏 子：車があるんですけど。
大 宮：はあ。

.....

夏 子：ああ、すごいわ！でも、なんだかバカにされているみたい。
大 宮：あなたを？
夏 子：お仕事見せていただきたいてって申し上げたのよ。お魚見せてごまかすつもり？
大 宮：そんなことをいう人に僕の仕事は分りませんね。この魚を見てるだけで、時間を忘れる人でなくちゃ、僕の仕事の面白さは分らない。
夏 子：人種差別ね。
大 宮：製薬会社の研究室にいるんですってね。

夏 子: ええ。

大 宮: 意外だったな、野島から聞いて。

夏 子: でもまだ、ほんの使い走り^㉔なんです。大学出ただけじゃ使いもんにならないって言われて、週三日大学院に通わされているんです。

大 宮: なんですか、テーマは。

夏 子: おそらく、あなたには興味のないこと。

大 宮: 仕返し^㉕ですか。

夏 子: (笑う)

大 宮: (笑う) しかし……

夏 子: え?

大 宮: こうやってあなたを見てると、研究室にいるあなたなんて、想像もつかないなあ。

夏 子: そういうふうに思われるの、好きですけど。

大 宮: やっぱり白衣を着るんでしょう?

夏 子: ええ。白衣着て、めがねかけて、 $\text{NaCl} + \text{H}_2 + \text{O}_2 + \dots\dots$ (とシャガレ声^㉖で)

大 宮: (笑っている)

夏 子: (笑っている) ありがとうございます。

大 宮: いえ。

夏 子: さあ、どうぞ。

大 宮: ご存知でしょうけど、僕は野島の高校時代の友人なんです。しかし大学でも野島ほどの男には逢いませんでした。僕の家は秋田の百姓なんです。おじが鎌倉にいて、いい大学に入るには、高校から東京でやれと言いましてね。そのおじも、いま秋田に帰っています。とにかく、田舎から出てきて、湘南の高校に入って、野島がいたことは、本当に幸せでした。似た所はちっともないんだけど、僕は彼に追いつこうという気持で、随分沢山のものを学んだような気がするんです。

夏 子: なぜ、急にそんなお話なさるの。

大 宮: いや……

夏 子: なぜ、野島さんのことをおっしゃるのかしら。

大 宮: だって彼はあなたの……いや、野島の恋人は、あなただからですよ。

夏 子: お送りします。

大 宮: (ナレーション) 次の日曜日、ぼくはテニスに行かなかった。今になって思えば、ひそかな予感が、僕を抑制させたのかもしれない。休日の港湾調査をかって出て、横浜港へ出かけたのだった。

.....

夏 子: お休みなさい。

野 島: じゃ、あさっての夜はどう。研究所へ迎えにいくよ。映画でもみようか。

夏 子: こんなこと、もうよさなくちゃいけない。

野 島: なぜ。

夏 子: あなただって分ってるはずだわ。

野 島：分らないな。
夏 子：私達、愛し合っていないのよ。
野 島：言葉は軽く聞こえるかもしれないが、僕は君を愛している。
夏 子：こんなふうになるなんて、思っていなかったわ。認めまいと思ったわ。いま私、あなたを愛していないわ。
野 島：僕のどこがいけない？
夏 子：そんな事じゃないこと、分ってるでしょう？
野 島：僕は諦めないよ。
夏 子：さよなら。
野 島：ちょっと待って。
夏 子：離して。楽しかったわ、いろいろ。
野 島：訳がわからないじゃないか。ね、どうしたのさ、いったい？

.....

大 宮：よう。
大 野 島：悪いな、おそく。
大 宮：悪いもんか。さあ、入れよ。
大 野 島：ひどい雨だなあ。
大 宮：横浜で降られてな、まいったよ。
大 野 島：横浜にいったのか。
大 宮：ああ、臨時の仕事でな。
大 野 島：そうか。
大 宮：氷ないけどな。
大 野 島：ああ、いいよ。
大 宮：そうだ、お前、車か？
大 野 島：泊めてくれないか、今夜。
大 宮：どうかしたのかい。
大 野 島：うん……
大 宮：どうした。
大 野 島：彼女がな。
大 宮：うん？
大 野 島：俺は人間の底が浅いからな。長すぎるとボロが出てくるんだ㊤。
大 宮：なに言ってるんだ。
大 野 島：お前はいいよ。単細胞で、魚がすきで、いつもニコニコ迷いがなくてな。
大 宮：おい。
大 野 島：うん？
大 宮：どこかへつれ出してって、やっちゃえよ。ああいうのは、口で言ったって、ラチがあかないんだ。
大 野 島：野暮天が何言ってるんだ。惚れちまって、そんなことができるか。
大 宮：そうか。そりゃそうだな。

.....
大 宮：（ナレーション）野島の仕事ぶりを見ていると、恋というものの不思議な力をあらためて感じた。

野 島：どこで食うかな、夕飯？

大 宮：ああ。

野 島：お前が東京へ出てくるなんて、珍しいからな。

大 宮：うん。

野 島：秋田料理はどうだ？

大 宮：いいな。

野 島：よし。じゃ、新宿だ。

運 転 手：バカヤロツ、気をつけろ。この野郎！

野 島：なにを！一時停止はそっちの方じゃねえかッ！

運 転 手：バカ野郎、出てこい！

野 島：おい、やっちゃうか。

大 宮：よし！

大 男：なんでえ、なんでえ、やる気か。

野 島：こりゃやばいな。

大 宮：今更ひっこめる^㉕か。

野 島：よし、やろうか。

.....
夏 子：（笑う）そうだったの。

大 宮：しかし、野島は向うっ気だけで、そんな喧嘩をしたと思いますか。荒れたかったんでしょ、彼は。

夏 子：野島さん、そんなに私たちのこと、いろいろ……

大 宮：いいえ。ただ、あなたと愛し合っていたこと、今はそうじゃないこと、しかし、野島の気持ちは変わらないこと、それだけです。

夏 子：それで、あなたに、何を頼んだんですか。

大 宮：彼はそんな奴じゃありませんよ。

夏 子：そうね。

大 宮：野島を見ていれば、誰だってあなたに逢って何かいわずにはいられません。愛情がさめることはないなんて、僕も思いません。きっとさめるんでしょ。ただ……野島は、行きたがっていたリオデジャネイロ^㉖の仕事も断わったそうです。何も感じないものですか。かつて愛した人が、それほど打ちのめされていることを聞いても、何も感じないものですか。愛ってというのは、そんなに頼りないものなんですか。

夏 子：大宮さん……

大 宮：なんです？

夏 子：野島さんと私、何もありませんでした。

大 宮：なぜ、僕にそんなことを言うんです？

.....

大 宮：（ナレーション）野島のために言うべきことはすべて言ってしまった。これ以上夏子と歩くことは、余計なことだと何度も思った。

大 宮：さよなら。

夏 子：大宮さん！いいえ、さよなら。

.....

土 井：大宮さん。

大 宮：なんだ？

土 井：八戸[㊤]の研究所から依頼があったことを知ってますか。

大 宮：八戸？

土 井：人工岩礁をテストするんですって。

大 宮：それで？

土 井：技術提携しないかって所長のところに依頼があったんですよ。

大 宮：うん？八戸か。

土 井：二ヵ月ですよ。ちょっと長いですね。

大 宮：うん。

.....

浅 見：ああ、あぶない。

本 多：エーテル[㊤]がある！

大 勢：消火器、消火器、消火器！

夏 子：消えたわ。

浅 見：命にかかわるんだぞ。この野郎！

山 西：すみません。

本 多：ああ、あ、メチャクチャ[㊤]じゃないか。

夏子の声：どんな言い方をしても、恐らく言い訳めいて聞えるかもしれません。でも、今になって思うと、愛がさめたのではなくて、はじめから、愛などなかったという気がするんです。野島さんは私の周りですでに一番魅力のある方でした。だから私も野島さんへの気持ちを愛だと錯覚したのでしょう。でも心から、これが愛だという気持ちで、野島さんとお逢いしたことは、一度もありませんでした。これが愛なのだろうか、この程度の心のたかまりが、愛というものだろうかという小さな疑いがいつも片隅にありました。そして、いま、どんなに気まぐれに思われようと、私の中にあなたがいるのです。お笑いなさい、軽蔑なさい。移り気で気まぐれな女と、私自身、何度も自分に向かってそう言ってみたのですから。でも、私の中にあなたがいるのです。

令 子：大宮さん、寝てばかりいないで、手伝いなさい。

大 宮：ああ、ごめん、ごめん。

大 宮：（ナレーション）思いもかけない手紙だった。どうしていいか、わからなかった。僕はただ、夏子とも、野島ともかかわりのない世界を求めた。

令 子：石田君、ありがとう。

石 田：うん。

大 宮：どうも、ありがとう。

石 田: いいえ。
令 子: さよなら。
石 田: さよなら。
令 子: テニスよりヨットの方がお上手ね。
大 宮: ありがとう、きょうは。いい連中だな。
令 子: 兄のヨット部の後輩でしょう。おい、のせてやれよって言われると、全然素直なの。

大 宮: お兄さん、OB^⑩?
令 子: ええ、とっく。
大 宮: またのせてください。
令 子: いいわよ。
大 宮: 仲田さん誕生日に誘ってくださったことを思い出して、ちょっと図々しいかと思っただけ。

令 子: 今頃言いわけしてるの? (笑う)

大 宮: (笑う)

令 子: あら。

夏 子: こんにちは。

令 子: こんにちは、なあに、こんな所で。

夏 子: 大宮さん、待ってたの。

令 子: あら、そうなの。

大 宮: 僕になにか用ですか

夏 子: 用なの。

.....

夏 子: 大宮さん、私がお送りするわ。いいでしょう?

令 子: ええ、どうぞ。

夏 子: さよなら。

令 子: さよなら。

大 宮: どうも、ありがとう。

令 子: いいえ。

.....

夏 子: 手紙、読んでくださいました?

大 宮: ええ。

夏 子: いくらでも、私を罵倒してください。

大 宮: 忘れましょう、手紙のことは。野島のこと、僕はもうとやかく言い^⑪ません。お逢いするのはよしでしょう。車を止めてください。それだけ言おうと思って、乗せていただいたんですから。止めなさい。何処へ行こうって言うの? 何を考えてるんだ? あなたは。君は自分が何を言い出したか、覚えているの? 野島を愛さないということは仕方ないことかもしれない。しかし、僕のことを書いたのは、どういうつもり? 野島がどんな思いをするか、考えたんですか。言っておくが、僕は、友達の子

人を愛するようなことはしない。

夏 子：あたし、ただ、あなたが好きなの。

大 宮：僕はそんなこと、信じられないな。僕に何があるんです？ 金もなければ、洒落っ気もない。あなたのような人が相手にする人間じゃありませんよ。できたら野島をもう一度考えてやってほしいな。

夏 子：おりて。おりたけりゃ、おりて頂戴。

大 宮：（ナレーション）野島に友情を持てば持つほど、その野島の愛しているものに心ひかれる。これは自分でもどうすることもできないことだった。

所 長：そりゃいいが、君は四国からもどったばかりじゃないか。

大 宮：ひとり者のうちに、いろんな海を見ておけて言ったのは所長ですよ。

所 長：いいのかい？ 君は。

大 宮：お願いします。

所 長：しかし、土井君が言ってたぜ。

大 宮：はあ？

所 長：四国が余程淋しかったと見えて、帰ってからは、日曜のたんびに女の子をさがしに行くって。

大 宮：人聞きが悪いなあ、それは。

所 長：（笑う）私の方針は変らんがね。北に調査船あれば出掛け、南に漁業栽培あればとびこむ。予算をやりくっても、若い人に働いてもらえば、結局それがこの研究所の財産になるんだからね。

大 宮：はあ。

所 長：二カ月だ。行ってみるか。

大 宮：お願いします。

所 長：いいだろう。OKがでる②までかかるかもしれんが。

大 宮：はあ、よろしくお願いします。

.....

夏 子：こんばんは。

大 宮：出ましょう。逢うのはよそうと言ったじゃありませんか。

夏 子：私の事、お嫌いですか。

大 宮：そんなこと言ってるんじゃないんですよ。

夏 子：お嫌いです。私にはそれしかないです。

大 宮：あなたは、何かの意地でそんなこと言ってるんじゃないでしょうね。

夏 子：ひどいわ、そんな言い方。なぜ、私の気持を信じてくださらないんですか。そんなに私がお嫌いですか。

大 宮：嫌いじゃありませんよ。しかし……

夏 子：野島さんのこと、おっしゃるのはやめて。

大 宮：僕は近いうちに、青森県の八戸に行ってしまう。長い間。

夏 子：私から逃げるんですか。

大 宮：そうです。